内閣文庫圖誌

内閣文庫
書號 和 28163
冊數 4 (2)
函號 174 257

内閣文庫
和書
二八一三
函架 二四三
冊數 四

内閣文庫
和書
二八一三
函架 二四三
冊數

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

日光巡拜圖誌　巻之弐

二王御門左右阿吽乃二王長壱丈弐尺余裏乃方壱
度獅子吼御門英麗なるこゝよりしきはなすを
手ゝ祖父八幡陸國の産なるをの王加き附屋の
拘御門ゝ乃陸國康治神変の二王門ふハゝの帯乃
如く二王ゝゝそゝゝ少き二王ゝ陸ゝ長ゝ見ハ
日光の二王ゝ鹿角の御あゝしの水を盜ゝ牛
来ゝとゝゝゝなゝ拝ゝ立ゝ拝二王樋を拝まあげ
ゝゝ文ゝ日光ハ二王門のゝゝゝ二王ゝ

明治十五年購求

一書曰
御宮並御脇堂杜惣御構十一畳
御殿地惣坪数五千坪
御菜園場惣坪数七千坪
御本坊御構六町
坪数六千九百坪程
建家千二百九十六坪程
延享元年改

御仮殿 三間二尺二寸六分四方
四ツ又入母屋破風千木
勝男木アリ

御普請ノ節下遷宮ノ御仮殿

ツキ鐘
時ノ鐘口差渡四尺八寸
拿五寸五分

高一丈二尺五寸

十月十五日
御湯立ノ釜ニアリ

御本坊

東山宿坊道

二王門

御庫

一書曰
仁王運慶作
表高壱丈
高三尺八寸五分
桁行梁間四間八寸
梁間二間一尺
八足門四ツマ
流破風銅凡

酒井讃岐守忠勝奉納

一書曰下ノ初重一丈六尺四方
高サ壹輪上迄一丈三尺
惣高サ九輪迄十丈五尺

御殿地

陽明門

朝鮮鐘

朝鮮燈籠

琉球燈籠

紅藏

薩摩

手水舎

番所

御馬屋

陽明御門ハ[illegible]禁裏ノ陽明門ニ擬ス表ニハ左右御隨身極彩色裏ハ風神雷神也御門ノ額ハ後陽成院ノ宸翰也俗ニ勅願門ト云　名跡志

東西二間　南北二間　日光志

此額ハ院ノ帝ノ[illegible]ニ[illegible]ル者一[illegible]人　日光法華八講記

一書ニ

桁行京間三間三尺九寸
梁間二間九寸
唐破風両ツ千鳥破風
入母屋造銅瓦

日光志ニ曰

廟ノ下外面石壁ニ
掛ニ朝鮮ノ所上
三紅一本ノ者一
枚十二

御庫

物ダイ
朱塗

三ツノ御庫アル所ノ西ノ
補足ニレルス

仙臺燈籠

銅鳥居

此辺燈籠
多シ
柱差渡一尺八寸
高二丈七寸

一書ニ曰御鳥居屋根銅瓦
瓦内外濃溜塗西ツマ
破風孤格子ヅリ黒塗

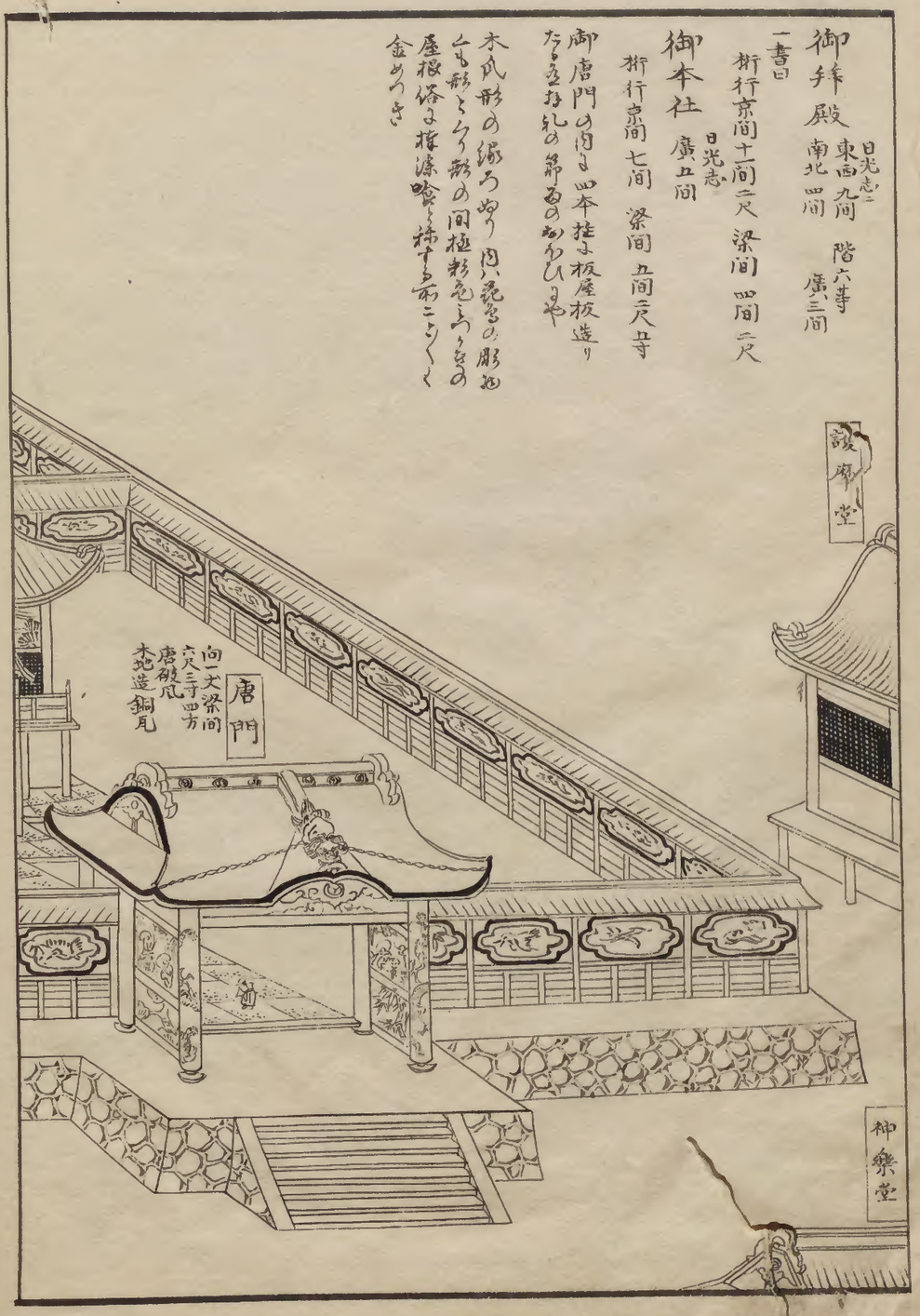
御拜殿　日光志ニ東西九間　南北四間　階六等　廣三間

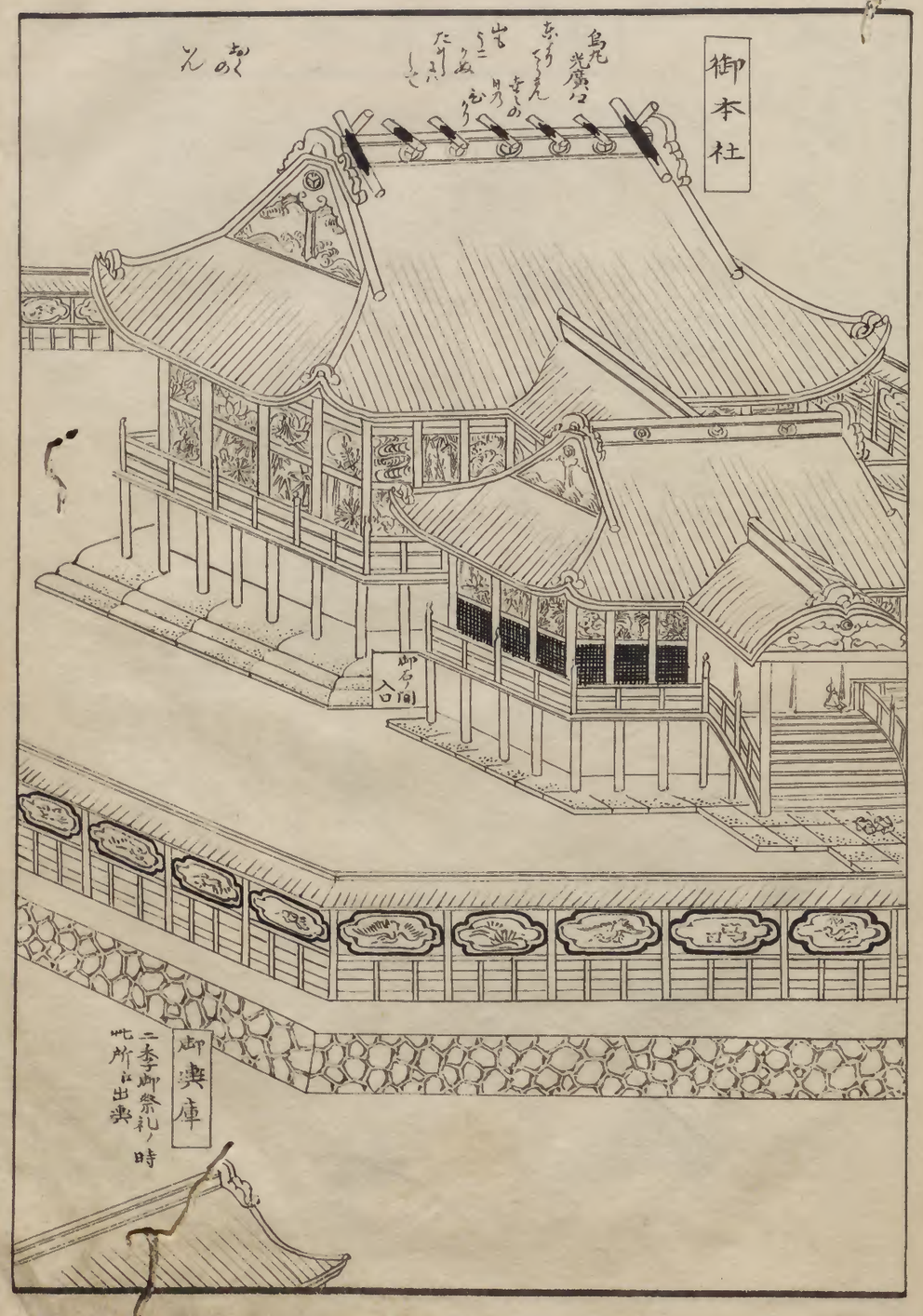
一書曰　桁行京間十一間二尺　梁間四間二尺

御本社　日光志廣五間

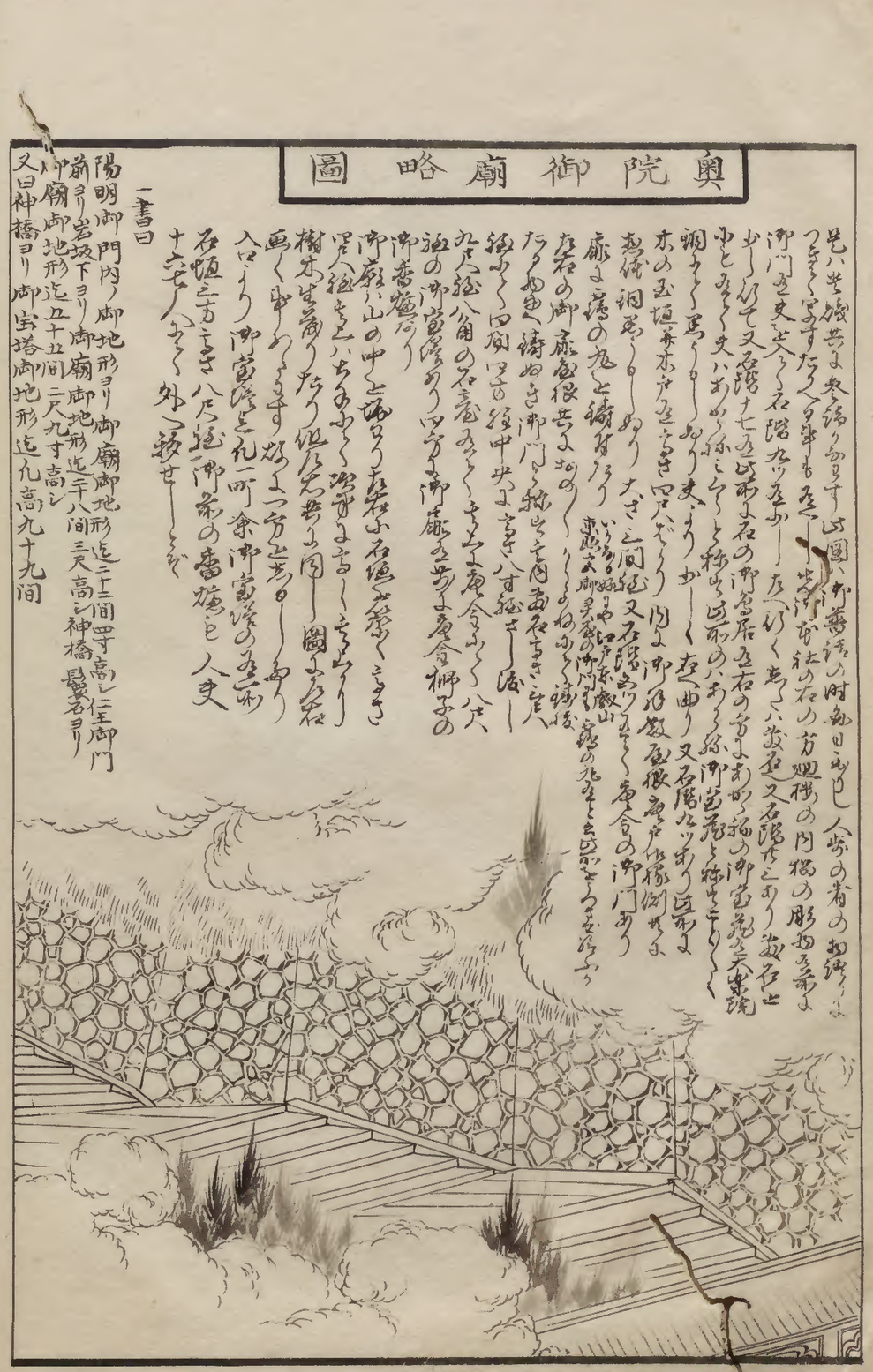
桁行京間七間　梁間五間二尺五寸

御唐門の内は四本柱は板屋板造り
たるき丸の部面の部分ひしゃ
木瓜形の彫刻の部分　内、瓦葺の部
分も彫刻の間極彩色ふるきの
屋根瓦は桧皮葺　棟は瓦にて
金めっき





奥院御廟略圖



一書曰
陽明御門内ノ御地形ヨリ御廟御地形迄二十三間半高シ仁王御門
前ヨリ岩坂下ヨリ御廟御地形迄三十八間三尺高シ神橋髮石ヨリ
御廟御地形迄五十五間二尺九寸高シ
又曰神橋ヨリ御宝塔御地形迄九高九十九間

なりといふ事門に立てる石の四方に物を彫りて
居るもの也とし春信一見して其の彫りたる物
二王尊を画くものなり西の一見して其の彫りたる物
なるべし常陸の国に門を入て左右に金剛力士
三つあり左義なるべし角なる柱に
四つ四隅に左右の指を組合せたるさまにて
あぜくらの如し

和名鈔に校倉と書く阿世久良と読む
下学集に穀庫とあせくらと点ずあり

京都に所々に所々に人々あり
東海道箱根蟹沢より西
校倉也も也に組まれたる人の字なり
二王御門に左右の石像御別所大楽院なり
是は東照宮御別当寺なり毎日此所に
神供を備へる日光にては御別当寺成
別所と称す
左に御厩素木造りなる御神馬は下総より
御参詣の時は此所に来る御手水屋柱 御鉢石
一隅に三段つゝ四方に拾弐段建てすべて四角に彫

たりたる水うけの横木も石ゆゑ同じくさや形の
ほりもあり之れを法二一たる御水盃と共井ハ
浪よ花能の彫物乃ゆゑハ端濤彦根前の位賀ゆゑ
運送しゝ御寄納なり奉法の者ゆゑ多法
にすゝぎゝ清ゆゑなゝしゆゑ経義文ゝ石の清蓋る
乃乃ゆゑ石塩行り唐獅子の花りる形と彫ゝ色ハ
石塩の乃ゝ繊ゝ一ツ乃石なり
出入の法よ目光御実造営ゆゑ
大獻上神ゝ御社参ゆゑ加ゝの事ゆゑとゝし
たりと者ゝ御称英の清意なり造営乃

奉法清水と云むの思ひゝ自彩ゆゑ
ゝ心ゝ定あ居ゝ事ゝ此獅子の彫物ゆ
ゆゑ御感心のゝ上意ゆゑハ御奉法
面目と乃ゝ一乃事ゝ乃事思ゝ者
此獅子二石ゝ彫乃ハ全際なゆゑ加ゝ
乃事此御造営ゝ乃ゝ何程の事ハ
あゝ乃ハ全秘密の事なゝんゝ乃ゝ
清ゝ日光志ゝ乃ゝ
石階、左右石欄鑿而作欄非他判柱施衡者
此石獅子二頭以足蹴欄連欄一石也

獻廟至此顧侍臣曰此宮形勢真堅固也已上
右の如くなるに初の法とハかゝる異なるとも
麗ハ似たり御深意ある事なり係る御
なるまゝすべてなる若輩とはなるまゝ奇
巧をハ尚ふ所なり此獅子の如きハ巧なり
云〻〻但外ハ如何なる事なるや再拝ハ此事ハ
いまだ入口なりあまりなく上覽の上ハ中略〻
鐘樓鼓樓あり右の方ハ朝鮮人撞鐘を諸あり
序の事 朝鮮 李植撰
日光道場為

大權現設也
大權現有無量功德合有無量崇奉 結構
之雄也
未曾有繼述之孝益彰先烈我
王聞而歡喜為鑄法鐘以補靈山三寶之
供仍命臣植叙而銘之銘曰
丕顯英烈 肇開靈真 玄都式廓
寶鐘斯陳 參修勝緣 資薦真福
鯨音獅吼 昏覺魔伏 非器之重
唯孝之則 龍天是護 鴻祚偕極

崇禎壬午十月日

朝鮮國禮曹參判　李植撰

行司真吳竣書

例ハ琉球ヨリ献ル三十六缸の焼壺アリ薬丙の者
ハ此燭一ツ而ハ油ヒツケハ不消ル此ハ思フニ
此燭ハ[illegible]ヲ建ヘキ形ナリ近年江戸ニ国ヲ
尺ヲ[illegible]ル猫燭ハ此形ナルヲ一丈ト同ク[illegible]ハナリ
日光志ニ曰三十六缸高八尺許勢如荷葉之
出水参差相兼蓋皆相通以膏注一缸則
餘缸皆盈庳者不溢高者不涸亦朝鮮所

上也　薬ヲハ朝鮮ヲアルハ誤ナリ琉球ヨリ出ル所ナリ

[illegible]文ハ薬丙の者ヲアルハ他の人ヲ薬丙ヲナリ
此方の薬丙ハアラス[illegible]国
右のヤウ足ヘ[illegible]ハ薬丙の者乃此ルヲ[illegible]ハ
あ[illegible]し但朝鮮の献上ヲアルヲ誤リなるヘン
法華ハ講記ハ朝鮮の錄の前ハ[illegible]
灯籠ハ琉球国ヲ[illegible]ヲ[illegible]
なるヲ

名所志ハ琉球の献上ヲアリ此ハ[illegible]ハ
[illegible]ヲ[illegible]ハ此燭ヲ五尺半ヲ[illegible]

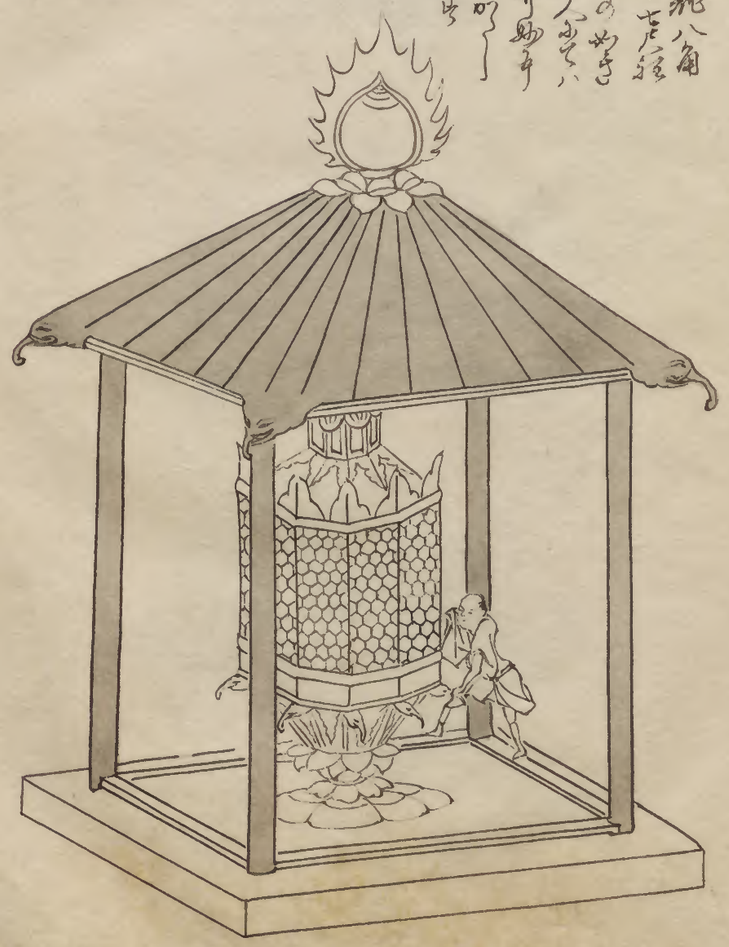
朝鮮國献上鐘之圖

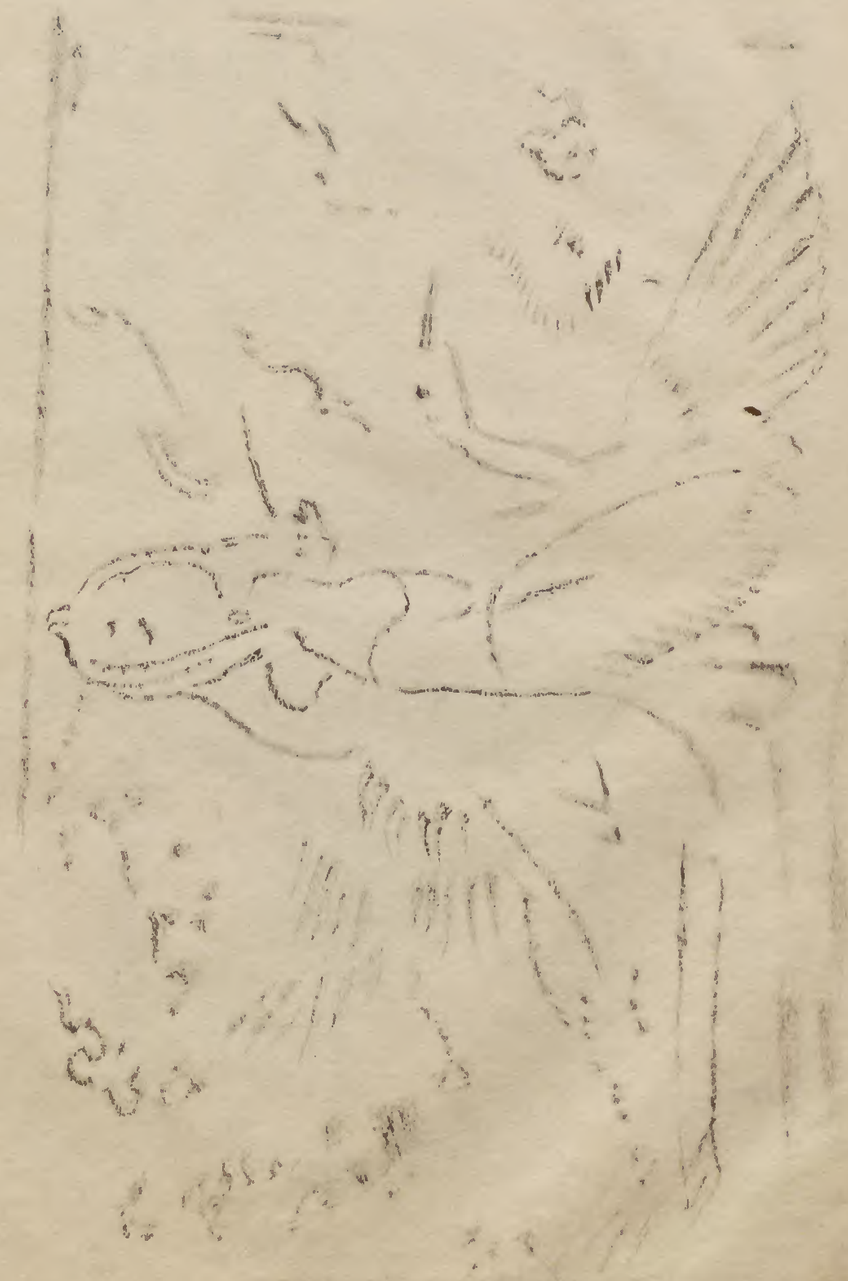
一書曰外面長丈四方高サ石口より
長柄下迄長丈七寸

上段武間四方柱根元朝鮮
黒漆塗彩色うす黒く中ゝ仙人
楽器等之彫付たるよりね常生
つくり五月之ゝ日御献式の時なりしまり
となり
龍頭の間より穴あり撞木撞南鐘の
紀より鐘より穴あり此八間子
あり鐘をかくしく
間子と合するなりと
又撞木撞木受かゝ

慶安元年四月
東照宮三十三回御忌の節
なりゝ
法華八講記より朝鮮國より奉る
花綿代ゝ
ありきやのよ上よりきさめる
事植り銘ゝあきやうなり

右同廻金燭臺





同内之圖

琉球國献上三十六釭燈臺

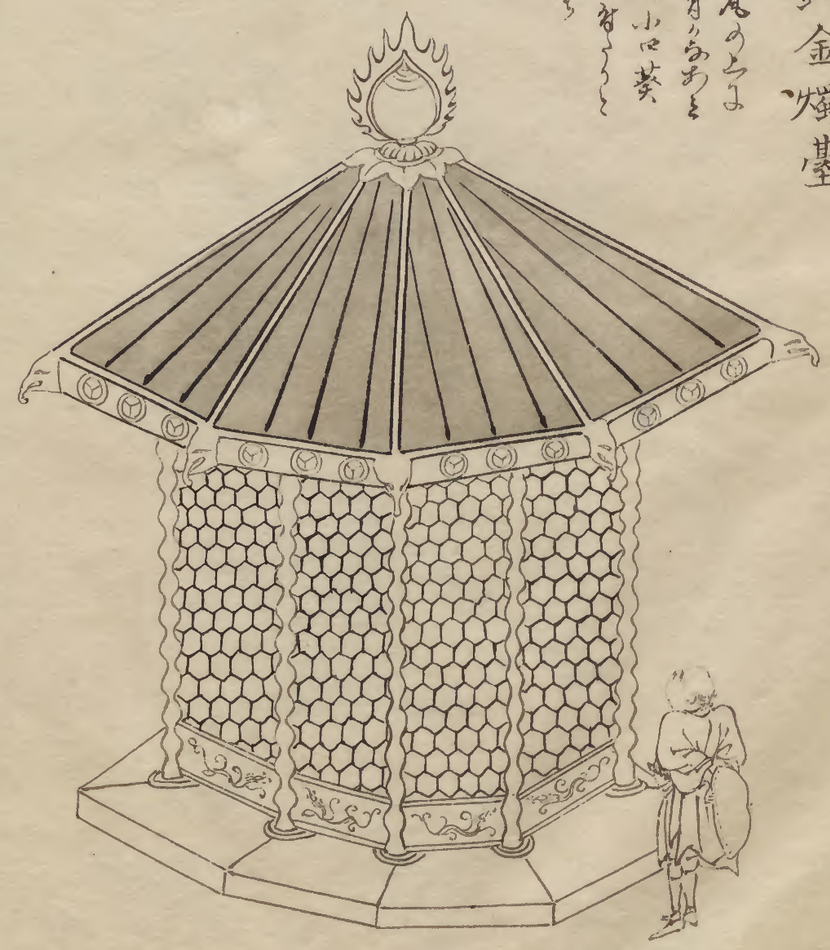
銘曰

靈神盛德　永固洪基
宝餅資福　銘刻愧辭
花飾瓔珞　葉深瑠璃
請天下降　瞻仰獻之

中山王尚賢奉

阿蘭陀献上鈎金燭臺

高さ六尺五寸　直根廻の大さ
赤銅造り　黒ちぬり　燒付の為あり
さし渡し　九尺六寸　廻の小口　葵
御紋　青銅　一ツ　逆さまに有之
此外　心つかひ　足あり



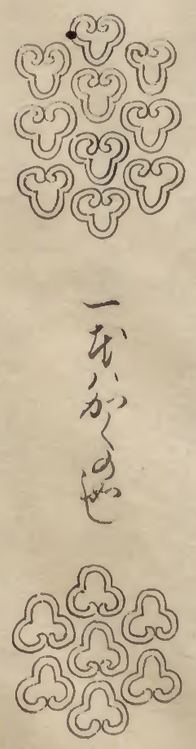
同内之圖

三色も四面に燭あり

阿蘭陀國銘
逸聞日光山
東照大權現大御造替貢使舶献三十枝缸之
燈臺壹基因置日光山之宝庫者也
寛永十三年　四月十七日

朝鮮乃初より所さまつる乃廻り妃殿阿蘭陀
乃納妃殿あり　並に御本地堂本尊藥師瑠璃之外
風来寺禅の藥師とこれ　二基　十二神將と安
置す　此御堂大仏蓋ふしぎ奥麗なる程金彫琴
なりけるの地紋より動きまぐ仏も　金銀とちりばめ
たる宝殿乃天井より　尺八間より　蟠龍たる龍の画あり
狩野永真安信筆なり　陽明門より入る武士ハ此所
ゆくゆくとゆきゆく御門より入る　此御門造構比類
彫物ハ琴碁書画　周公旦　臧拐　費長房　盧敖
琴高　阮籍　管廉　豊干　孟献　孔子　顔回と婦

三笑　四友　九諦　六侍より　彩まぐ　爪より　詩すよいとも
ゆゆしき生動ハ　狛虎　彩　麒麟　獅子　模　何色も　鮮
乃彫より　刻めり　或ハ　ゆゆ　ゆゆ　ゆゆ　ゆゆ　ゆゆ　ゆゆ
ゆゆも　極彩色なり　同ゆゆ　減金の　ゆゆ　ゆゆ　ゆゆ
光り　ゆゆ　ゆゆ　ゆゆ　井乃通りの　天井の　龍と　八方四服の
龍なり　ゆゆ　ゆゆ　ゆゆ　ゆゆ　ゆゆ　ゆゆ　ゆゆ　ゆゆ
金めつきの　毛彫なり　後の方　程　ゆゆ　ゆゆ　ゆゆ　ゆゆ
別めり



葉門の者曰 世子逆相なる日光御普請無しい
普請なし 英吉世子 寄十方なれハ四ツ半ごろ
四ツ半 世子逆よせりと云四ツ之尾上鈴之
新津も有之ハ如ク新津を立 俱常中乃有ハ
二番之通ハ 盤ハ一番ハ盤ハ一番ハ盤ハ之如ク
なるべしなるべし

或人曰 上意之ハ洲濱ハ有て出之
なるべし 又洲濱ハ出る形も元来小実
なるべし

御門を入て庭なる者ハ栗石ハ信州より運
しなる者の御四方形廻 百間鎌彫物ハ松竹梅の
彫物 あり右ハ神楽堂毎日八乙女出仕して神楽之奏
神楽所 東西之間 弐八八寸四方あつまる 祇園
入母屋洞尾
護摩堂 形ハ三間ハ八四方入母屋造洞尾
同所なる護摩堂 護摩堂なる大ハ明五十二天上安置す
四所ハ 四ハ九月十一日 十七日 天下安全の御祈
禱の護摩を修行せり 夫ハ御唐門常来
造恵たいごろん 塗たるなり 御板上り能 能
梅竹の彫物金具繋 四ハの祇園ハ詩曲 巣父或ハ

七賢、七福神等の形あり、天井に天女の形あり、天女の形、
十六羅漢なり、表の方より拝めば、裏の方より背み、
面なり、彫刻ず、唐木にて一枚の板に二面鐫る
ものなり、二面のうち、一面を除の外に用ひ、遺りの一面
御座根の上に唐獅子、恙なく出来なり、
唐獅子の如き象なり、左右御獅子、多年経て
の形あり、さて御獅子の所より如形階に
多き論を渡る階に左右に社人僧流れ法華経の男女
二重に立ち、扉一面なる御彫刻、御社殿に張抜嘉
よりの一言に、二重に蔵ふ、日日光と見れば
結構なる以て名言なるべし、仏門に
好すべきも能つまり、
芭蕉翁奥の細道に、御山と二荒山と書しと
海大師日光と改称ふ
あらたかなる霊験の日乃光
漫游文草曰是謂壮麗亦不敢是謂威霊
亦不敢是謂盛徳亦不敢一掃妖氛救民塗
炭封建制成三百諸侯争奉功徳献物琉球
三韓施及西洋之戎威霊之所及舟車両露
成徳亦遠矣　献廟盡海内之力以極壮麗善

義之所譜其至矣哉

日光志元和二年四月十七日

神君於駿府城御他界兼て天海僧正に

御契約ありし光國久能山より殯宮なる御壽七十三歳

同年十月二十六日より

日光の御陵御造営あり奉行ハ戸田左門藤堂和泉守高虎なり同三年二月二十一日より

東照大權現に贈る同三月十日久野山より

御宮殿を日光へうつし奉る天海僧正御先達

御供ハ土井大炊頭利勝松平右衛門佐忠吉板倉内膳正

重昌秋元但馬守泰朝等なり

按ずるに十月より初て三月より始る是ハ六ヶ月なり

然るハ奥の院の御廟のことなるべし但如何

おもふにや考すべし

日光御遷座之記より爲光光房卿の作曰そもそも元和

十あまりなゝつの年久能山 宮殿を日光山へ

うつしまつる年ハ大職冠と摂津國阿威山より

文武帝より定恵和尚の見てゝ中興なりし

天てる御神も倭姫命より十餘門の上年経給

なりけり 男山の御神ハ行教宇佐の宮より

かゝ和尚の三ぢ家を建せられ給ふ此さとに
御現身の時まで三ぢの御位をしゝ御神物
なをしゝ給へしゝ大僧正天海まのわたりうち
ゝをさめ給へしゝまた十器さゝゝ神殿ハ今遷宮
なる中器 今日の法華堂ハ富士のふもとゝ善
徳寺なり十二月ゝ弟子道源法師と通夜
三源よつの世話ふ器又乃月ゝ出家ゝ御ハしまた
あらたハ三ねと攀のわゝせ毎ハ山田弟子
つの世話ふ十九日ゝ出家ゝ御ハ
二ゝ月ゝの磯と通夜話ふ器ゝ中弟の法師ゝ

つの世話ふ先ゝ三弟の方ゝ三ぢの家ゝ
文ハ一國の惣社ゝ御ハ一國の惣社ゝ一日 府中乃
御殿ゝつの世ゝ御ハ一御世ゝ時ゝ同一所ゝ
法法寺ゝ学ゝ三る武蔵野ゝ方ゝ
今日ハ大堂ゝ中ゝまゝ世話ハ三ゝ
御世ゝ三る河越ゝ海ゝ悪の法師ゝ
時ゝハ数林法寺ゝ為ゝ
ゝ九る法師と立ゝ一里程ゝ
三所ゝ蓮覚大師生湯ゝ
ゝゝ通ゝ

今日一日ゝて春を山色にそよりる事と思
ふ事を思ひ出るに日光山座禅院は慈覚大師
かくゝ佛道を開ける御廟塔に御宮殿あり
さゝ十七日に新造の御やしろに遷御なし
給へんと議定あり学りるゝとも
扨は此年は元和十三年と云へ誤りなんと
只三年なり元和十三年なり九年なり
改元なり
又云さゝ かゝるの事 御遷座の半ばにて
俗に八菊光坊久能山より 御名殿に場也

背負て日光に登りるゝ
久能山ゝ八盗人坊なゝ今のしるゝ
以ふ日光ゝも中興ゝ以ふ
然ふ之ものを一さなり
大座禅院と中ハ今何也ゝ廻国雑記ゝ
ゝ坐坊座禅院ゝ之ゝ
かゝ滝おち佛ゝ
再考に漫遊文草に出るゝ 御遷座の
ゝと今世考ゝ法也初ハ今の如く荒廃
ゝハゝゝ家光公御代に初ゝ今

のゝく莊嚴よハ造ㇾ施ㇾしたるこ
慶安元年の法華八講記よハ御橋石香居
二王門うねの香居　うの御庫樓　敷橋
朝鮮の樓　琉球の燈籠　陽明門廻廊等
又西此時ハ未ㇾ全備せ―なるん
日光志曰寛永十三年十月宗對馬守義成
以朝鮮人至
二十年朝鮮王李倧思　神祖之德自書日光
精舎彰孝道塲八大字上法鐘及香爐燭臺
花瓶于照陵使其通政大夫禮曹參議知
製敎尹順之云云
正保四年九月以本院第四皇子尊敬為
日光座主叙品始以親王為座主
慶安二年九月二日阿部重次水野助長以琉
球人如日光
日光山　東照宮鶴香爐銘　林信勝
奉獻日光山　東照大權現宮寶前
千年玄嗣　一穗黃雲　香在靈德　郁々芬々
慶安二年月日　從四位中務大輔源姓有馬氏忠頼
又

奉献日光山東照宮鶴香爐銘
常誦蓮経　鶴來繞聴　爐烟日照　明徳維馨
寛永十七年四月十七日　太田備中守資宗
大樂院百五十石　龍光院百五十石　修學院日光學頭三百石
目代邑五百石山口氏世為之掌神藉之租税与
其政今明暦元年令日光邑一万三千六百石除之
輪王寺邑千八百石　梶氏邑六百石外百石之地
貢金十四両　已上日光志
塩尻の説ニ曰日光山一万二千六百石　輪王寺の宮
毎年四月十七日九月十七日御神事あり　四月

十七日には京都より例幣使を下し給ひて
宣命をさゝげらるゝ下向の式有とする例なりと
江戸よりは御名代なる高家衆壱人御祭礼奉行
大名弐人参勤　當年は高家は中條河内守殿
御祭礼奉行は保科弾正忠殿松平左衛門尉殿之
給ひしは中條河内守殿は西丸　御名代
なりしとぞ　将軍家には　御忌服の内ゆへ
御名代なしとぞ云
さて御宮と申すは　相輪塔をも拝せ　近年　楼まで
ありしたまたま見し其木の上にも赤銅にてもて覆へし

燒失なり　今回　御紋幕よ合あつき　御紋の中年
六十四句の額文　慈眼大師の文　合字なる字二あハ
偽敎大師はない山よ初く　建立すると　寄ふもうつきる
なるも　六ヶ所よ　ヶ所よ　ヶ所云　分定山ふとあるを　家何也よ
有や　遊ゝ　考へ　考へ　考へ　――　第四の者曰　地所ふもなきゝ
いも　黄山よ　初ふ　ふを　ふ年四句の文　慈眼大師の文　ふよ　考年
一書ニ曰　文化四卯年十二月廿九日　大雪　雨ふゝ　大風
ふ　附　吹　形る
御紋の上よ　白身の御　燒　封　收納なり　長八尋　紅　字
ふ　ふ　綿のまゝよ　也　玉　球　中よ　あるを

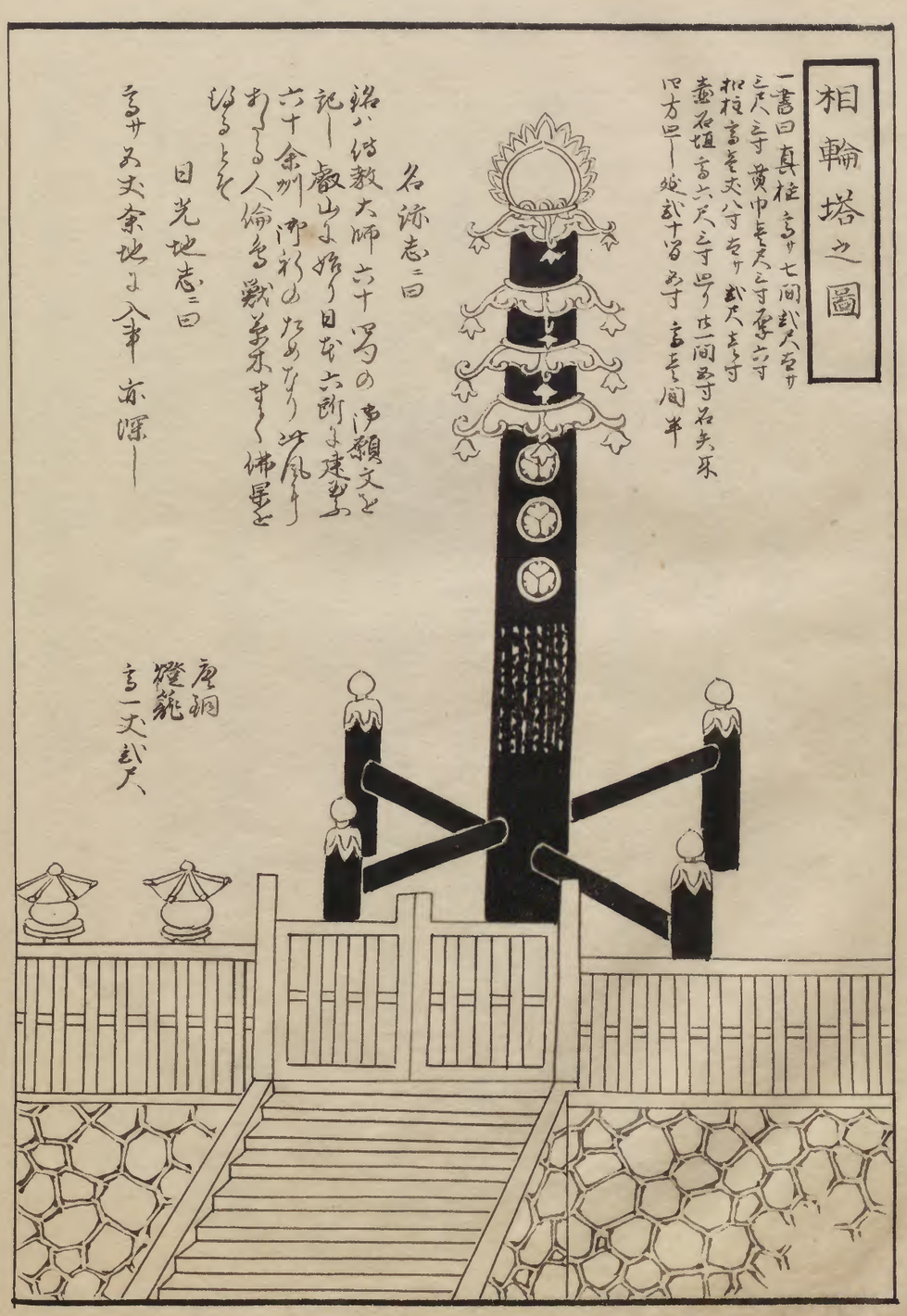
仙臺政宗　寄附南蠻鐵燈籠

色うす赤く　ちゝ　深の　ゆ

此圖ハ陽明御門の　先よ　載　ゝ　と　ゝ　し　なを
ゝよ　あゝ　ゝす

相輪塔之圖

一書曰真柱高サ七間弐尺五寸
三尺二寸 黄巾長尺二寸 厚六寸
相輪高サ丈八寸 径サ弐尺七寸
盤石垣高六尺二寸 四方ニ一間四寸石矢床
四方ニ一坡弐十宮 高サ一間半



名跡志ニ曰
銘ハ仏教大師六十写の伊額文と
記し叡山ハ始て日本六所ハ建立
六十余州 御形の如なり 此乱れ
ある人倫を戒め弟子すく佛星を
ゆるとそ

日光地志ニ曰
高サ四丈余地ハ八角 水深し

相輪樓

日光地志ニ曰大師天海與右金吾源正綱晉議以造建之
表上有銘 銘曰 此銘與洛陽叡山之銘同也

葦茅開廓　天主下生　短歌長歌　未防魔兵
第三十主　初開梵覓　沉像焼舍　法敷未鳴
聡耳立憲　乃信三明　使帰南岳　請経野卿
因果冷然　開悟群盲　時機未熟　淘汰五驚
天皇出家　感得天平　受菩薩戒　四車輿々
海内諸州　制底縦横　雖敷法筵　未遣五茎
豈若先帝　憑天台評　新立圓宗　永填火坑

年々両度　紹隆妙行　為悅冥道　起斯輪樓
叡嶺秀聳　朝影北都　神岳嵯峨　夕臨東湖
山王一等　思存給孤　法宿為号　開顯毘盧
亦塔亦幢　延壽安身　惟經惟咒　護國濟人
金剎放光　汲引迷津　宝鐸流轂　發開龍神
我等發願　渴仰文殊　十生出現　普施髻珠
信謗両友　俱舎四衢　同乗宝車　恒遊寂區
長講妙法　恒轉法輪　五忍恒說　永息魔瞋
生涯未盡　此願不泯　成住壞空　不散此塵
弘仁十一年歳次庚子九月中旬　最澄撰

銘下有記曰

謹案聖記曰傳教大師日本國中建六歳之宝塔祈
六十餘州所謂延暦以前鎮國專依百王権威延暦
以後聖運任叡山之加被就中大師者受生於王城之
東結縁於東國之境弘通佛法興隆人法總祈日本安
寧別誓東國之繁栄慈覚大師又於下野國都賀郡
誕生而不忘誕降之旧地殊於東國多建練若興佛道
彼弘法智證両大師出生於西土而興隆專限西州傳教
慈覚両大師降誕於東方而利益殊遍東邦測知日本
四域之中関東之繁茂悉傳教慈覚之大功也造塔延命

功德經曰若作自若教人作是人於此一生不為一切毒藥
取中壽命長遠無有横死窮竟當得不壞之身一切
鬼神不敢逼迫五星七曜隨順驅使一切怨家悉退
散〻〻抑頃年根先德之旧儀浪立新新宗或負古
賢之宗義說無種之妄言有異形裸形之僧尼纖神
社佛寺滅如来之正法當此時王法頽敗七難悉起矣于
時征夷大將軍從一位左大臣源氏長者家光公妙德周
宇宙高明朗大虚妙容雖不動光燭非無偏其德至
則政令自行偉哉德之至矣夫此樓者他不上言自
不假案自然發起而忽成可謂奇也傳教大師寶塔

之願文大日本國陰陽應節風雨順時五穀成就萬性
安樂紹隆佛法利益有情盡未来際恒作佛事矣若尒
當家々門相續武運長久天下恭平國土安穏而已

寛永二十癸未年卯月如意日

相輪樓寛永二十年　御宮奥院御建立
慶安二子年六月御山下御建直〻〻
阿部忠秋公御馬
谷御書集中一三回相輪塔の塔乃字樓〻書〻
結教大師の銘よ足〻〻〻樓〻い柱なり相輪
出六伯よ云九輪なり浮圖を造〻〻〻放樓〻云

相輪ハ僧徳律の中ハ塔乃上の盤奇と
ハ云なり名義集ハ仰ぐ瞻相なる故
云相ハ視るなり又相輪と業露盤とハ
形高僧伝法苑珠林等ハ云し　已上略文和解

文ハ三佛堂ハ諸門入口ハ新宮の名あり
御額ハ一位勲一等日光大権現とあり
一説ハ公寛親王御宸翰なり　名論志

三佛堂　一書曰形ハ十七間三尺余梁間十間五尺屋根桁尾
擬宝根あり南ハ入母屋瑞垣朱塗
當山一乃大伽藍なり安置ハ彌陀御長九尺寸
千手馬頭各八尺寸　慈覚大師の御作なり
日光三社大権現の御本地なり
三社ハ本文　新文　瀧の尾なり
堂の内乾の隅ハ勝道上人の御影あり
艮の隅ハ軍荼利明王の像あり文なり
三所拝殿右同

常行堂
本尊宝冠の弥陀四菩薩ハ多聞神毘沙
門ハ形朔日御骨納め給ふ　俗年
形朔堂ハ云宇多天皇寛平六年の草創

なりと右同

抑摩多羅神とは天台を護の神なり
羅山文集三十七曰摩多羅神又令毗羅と
名く鳥帽子袴を着し鞭を持左右に
童子あり一人は丁礼多と云一人は庄子多と云
或は立て舞或は敷を敷おはする最澄入唐して
天台山にあらしし時此神敷を敷し我海よ
ちらすべし日本よ勅ちんと云渡海の帝松乃
上に現しく我海を護る風帆つくなし此
ひくく渡海の後此神を彩色多摩多羅神

大已貴尊と一体なりと山王元是配此神
故天台宗信仰すと云
此文空華詩叢より引く此神和人の仏
ひくく委しく説あり
又造屋の記に図と中一点は長く論
あるて半長なれは異也
常行堂と法花堂と廊下と掛る
長八間巾弐間瓦根羽瓦堀朱塗

なすびの法華堂
本尊普賢菩薩鬼子母神十羅刹二十番神

伝教大師の御新あり
淳和天皇天長二年の建立なり世尊より伝教
大師御筆の法華経を納めあり
此所より二町程出でて

慈眼大師堂

天海御開なり寛永二十年十月百百三十
余歳にて入寂慈眼大師と謚号し日光大師の
御一称なり奥羽会津郡高郷義澄の子
出家し星利氏なり勝道上人より当山第十一代
の御座主にて中興の法開山なり

東照宮当山より御遷座ありしより大師の法徳
ますます御尊敬の前より御名水屋に御之家
法名院号を上る所乃石燈籠あり文政
四年

新宮御別所安養院より諸門文殊の像千手の像を
かゝ出でし当山御座主の御廟所あり
御座主安照院文少遠寿院准之后解脱院
文大明院文御名塔あり
文政年新宮より諸門前より移し
御安社八棟造り日光山大権現と称し奉る

一書曰女社形彩五百四尺余梁百五間六尺奈
女ツヽ入母屋向千多波風彩庚波風武彩重
重木組物出雲
殿庭門七尺押巳一四尺之屋根銅瓦

神名式下野國河内郡二荒山神社名大神
トアリ所謂新宮本宮瀧尾也

新宮祭神大巳貴尊也本地千手觀音
仁明天皇嘉祥年中慈覺大師建立名跡志
本宮阿遲鉏高日子根命也
瀧尾田霧姫也

按古事記曰大國主命娶坐胸形奥津宮
神多紀理毘賣生子阿遲鉏高日子根神也
故以父母三神為二荒鎮主者也
續日本後記兼和三年丁巳授下野國從五位上
勲四等二荒神正五位下同八年三月乙卯授
正五位上十五年八月甲寅授從四位下
文德實録天安元年十一月庚戌從三位勲四等
二荒神充封戸一畑以間之位記不見國史
三代實録貞觀元年正月廿七日授下野國
從三位勲四等二荒神正三位二年九月十九日

丙寅詔下野國正三位勲四等二荒神社始
置神主七年十二月廿一日授從二位十一年二月
廿八日進二荒神階加正二位
又東鑑卷乃六ノ内田地十五町日光山ノ寄附
乃事出同十八ノ巻ノ内日光宮新宮
本社文多ク御報賽ノ事アリ已上日光地志
元禄巡見帳ニ新宮御宝物
御太刀二振根ク切ノ長サ一振八寸ノ内ノ
宝治二年十二月ト切付ル 小山判官ノ甲
枝珊瑚樹長サ九寸廻重サ
又百四十目 蛇之玉落鳳ノ鏡ノ玉ノ
雷乃槌ツチ 七八寸廻鳳ノ鏡ノ
少シ小キ所アリ 駒の角 五寸廻

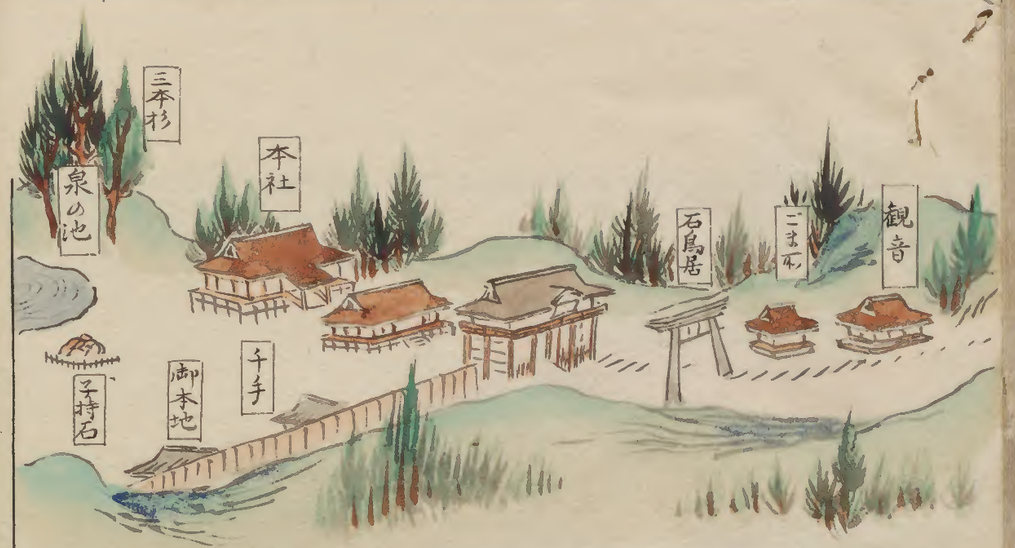
牛乃玉 只ノ五寸廻ノ中ニ
柏太刀二振七八尺廻小山判官納ル所 五ツノ玉 水晶ノ宝珠ナリ
法華経 菱亟相御筆 法花経 慈覚大師御筆
但蒔絵 先輪王寺御門主
御再興御下給ノ
月ノ兎松菊ノ文ヤ
毎年三月二日御祭礼当日氏子第八組
祈願ヲ以テ神輿ヲ御渡ス神輿ハ御宝
新文ノ社多シ
十八王子九尺 山王六間四方 阿彌陀堂九尺四方 大黒一間四方
十王堂六尺七尺 三尊石地藏石ト云アリ
二荒ノ滝ノ尾ヘ詣ント新文ノ方ヨリ坂ヲ登リ新
宮ヲ割テ右ノ方ヲ指ス武町 余アリ方ヲ就光院

大獻院殿御別所なり石さうと登る右よ薬師堂あり
其外あること多くあり服とあるべきあさ町よりなる
坂より見沈薬師なり又登りて行者堂（役行者）坂の庵
まるあり前よ道心寮あり此所なく休息を行者堂
右の方まで少しくなる岩坂なり少し行て右橋
あり滝の来あり流を高なり是を爺遠橋と云ふ
二丁ばかり大小便禁制の立石あり夫より所石坂
小登り山王社向拝遥て此左右皆杉なり
嘉祥年中慈覚大師御造営聖真子大権現
なり

文なり不動堂　中ほど二畳ばかりまよ運慶の作なり
向ふ八滝の庵と云る滝なり是を俗ニハさるん滝
と云ふ実八誤りなり実乃さるめん滝八ひんぬん
滝のまちまよあり但此滝の向ふを素新谷と云ふ誤
云るなまちと

法華八講記よ冷泉為景ハ
いよ又ちきすの山より落る滝の庵ハ水
廻國雑記よ滝の庵と申ハ女體の天神申く
御しくなる花滝のすぬ同とあるなり御書き
者ちと為く俗ハ契の来なるや此滝の庵の滝の所

瀧尾大權現圖



瀧の尾清浄の地なるべし
漫游文章なる瀧尾遇致可愛
とのみ

名称志ある九嵩山のあるべ
なる奥儀ハ嵩社なるべ
たるべしあり

日光地志ニ朝鮮人此瀧ヲ作レル詩アリ

天末仙槎挾我来　雨餘驚瀑掛崔嵬　銀河一決三霄浪
玉液長喧萬壑雷　声撼石壇吹地本　爽侵珠樹割山廻
飛流不讓香炉頂　詩意偏撓李白盃　朝鮮國　淳溟齊
飛流幾尺瀉雲巫　其下龍宮水府寛　逆落晴雷岳石響
霏微白雨洞天寒　呂梁只可觀游紲　庐谷徒傳煮月團
吾國朴渕尤勝絶　比之無乃此盃看　龍州
庐嶽曾為中國勝　朴渕飛作我那推　那知絶域千山裏
亦有飛泉万丈奇　勢接瑯空滄海立　色分青嶂白虹垂
東瀛日夜撇坤軸　倘為眠龍住少時　青螺山

文亀元年石乃厨子を造り中殿より之を安置す　金の石社
あり　二重二間四方共に日光より出る山の名なり　但し一之山の形上多る歟　方より坂中不動石祠あり
熊野杉と云ふ　著供養の堂あり　坂の上に御別所
此所にて日光責と云ふ　食物を好む者此所に来食
物を与へ浄し責なり　坂より拾町大きせるなり　責
乃具者より付出る　流の如くそうめん等云
文亀元年　正観音堂　本尊弘法大師作　柳行二百深百弐百小拵造
拵地護摩所　本尊不動　石の宮居　深さ楼門表年
二重　裏に風雷の二天　二百九尺　横巾六尺入母屋上に六重組　弐百九尺横巾六尺入母屋上に六重組　額に弘法
大師の御筆にて女郎中宮と有り門を入て向に

拝殿　柳行二百五尺奥深百二間奥横巾六尺入母屋破風　前方二尺馬塗横巾朱塗銅瓦
御本社　向拝造り二間四方　横巾朱塗銅瓦　祭神四霧姫命　本地阿弥陀如来
漢城天皇御造営此地に神まします
方の宮より此堂に方形造九尺五寸五尺寸法
此堂あり　鉄塔婆の如し　文明二年と有り
深山中渓の地にて石奥年の有り是に古比丘尼
年ふるほどなり

千手堂　弐間四方宮殿造　本尊弘法大師作
御本地堂　本尊阿弥陀観音勢至の三尊　恵心僧都作
根本社　大日如来　小社なり　向一尺八寸　横巾三尺六寸

子種石 七尺計り 高さ二尺計り 高さ 七尺計り

泉の御酒池

今も酒の香あり 是あるゆへ酒池

無尽天なり

三宝枝 三社の神木なり 何も大木なり

杉 又別に三宝随神あり

八講記 敬神と云ふ門のうへ杉に文をあらん

三十番神堂 元禄より下向

元禄巡見帳に 龍尾御宝物

女體中宮乃四字額 弘法大師御筆竪額なり

石乃御鉢 七尺計り 伏見院御筆巻の内に鉢あり 落嵐色紙の袋に入

阿彌陀経一部 朋日彩色の山の桜なつ色なく道奴宮うたる

法華経 弘法大師細字一巻に一部御徳 心経一巻 上同

法華経 後醍醐天皇御筆 法華経一部 後伏見院御筆

牛の玉三ツ すく竹色

釈鶴の面 内陳より紀伊頼宣卿御寄進のよし

駒の角 訳す程

翁乃面 釈鶴の面と一つ 第に入世尊面彩あり

狐乃火燈七ツ 高さ一寸 石も木也 何も

已上

さて下向道二便禁制の石碑あり 右元の所

[illegible]

飯盛枚（大杉なり）[illegible]

[illegible]

御神馬の碑　[illegible]

[illegible]　名跡志

日光志ニ銘を載せ但撰者の名尺ずず

御神馬慶長庚子歳濃州関ヶ原之

御陣駁於此馬而撃函徒矣元和丙辰

大樹薨御明年致馬於此山歴十有四歳

寛永庚午歳斃於槽櫪之間于嗟這馬也

駿足千里初艾浦欵段假非於其惟令習而

能乎所謂不立廐於寺厳於屠杭獨吾墟

白澤徒望門或人聞於馬來由延宝六戊午

碑於塚欲其名跡久不滅也看者其致思

焉

一書ニ林道春撰トアリ

右之碑ハ　大猷院様御小納戸役横尾嘉佐

定良の建る所なり　其ニ銘の尾石の書者ニ世人

自力ふく建立のゆへ入立代記之事不審なり

大猷院様薨御日光ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]則宿[illegible]

日光より居住し給ふ

石掛石 むかし掛硯の多とりけるなりしと

左の方に稲荷川なり

天神社 石の社なり

寛文元年二月廿日 茨京の大名居氏法眼信鴻

を宰府をうつし奉る

延宝七丁未年 六月廿日 彼商信祐石の社

ぶを造営せ

十王堂 向き文武天奥行九尺

地蔵堂 宝殿造なり 六間七尺武寸四方

宝殿拝殿 唯朱塗

此所を佛光寺と云 本尊 座像運慶の作并に

勝道上人乃御新木像 高七尺六寸 背裏に銘

上人の御墓并に御弟子五人乃墓あり

勝道上人の俗元亨釋書 巻十五に出 今略せ

大師弘法の記に依て記せ

日光巡拜圖誌卷乃式

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan